2026（R8）年度 教養学部学校教育学科 学校推薦型選抜（一般）講評

○課題文について

苫野一徳氏（以下、「著者」と呼ぶ。）の著作『『エミール』を読む』（岩波書店、二〇二四年、以下「本書」と呼ぶ。）のうち、第一章の中の「子どもの事実」とは何かについて書かれている部分を、一部を改変して用いた。

『エミール』とは、フランスの思想家、ルソー（一七一二－七八）の著作『エミール 教育について』（一七六二年）のことで、近代教育についての最重要古典の一つとされる。本書は『エミール』を教育学者である著者が現代の視点から読み解いたもので、読みやすい文体で書かれている。

○設問一

傍線部アで、著者は、「『子どもの事実』も、その関心から見た事実になってしまいやすい」と述べていますが、それは、どういうことですか。「子どもの事実」とは何かに触れながら、課題文に即して、二〇〇字以内で説明しなさい。

【出題意図と評価のポイント】

課題文を正確に読み取り、それに基づいて設問に対する答えにふさわしい文章を構成する力をみる設問である。

第一に、「子どもの事実」とは何かについて課題文から正確に読み取っていること（ルソーが言う、子どもが何を求め、何を学びたいかという事実のこと）、第二に、「その関心から見た事実」が教師や学校が把握している児童生徒の実態であることを指摘していること、が求められる。

【講評】

解答はおおむね、上記二つのポイントに沿って書けていた。ただし、「子どもの事実」と「その関心から見た事実」が区別できていない解答も、ある程度みられた。

○設問二

傍線部イの「強い動機に導かれた学びは、わたしたちを、学ぶことそれ自体を愛する者にしてくれるにちがいありません」とはどのようなことか、課題文の趣旨を踏まえながら、あなたの体験や見聞を交えて、六〇〇字以内で論じなさい。

【出題意図と評価のポイント】

課題文の趣旨を誤解なくとらえた上で、適切な「体験や見聞」を根拠にあげながら、筋道を立てて文章を展開し、みずからの意見を明確に述べることができているかをみる設問である。①子どもは元来、学びへの意欲をもっているのだから、学習内容を教師が教え込むのではなく、子どもの興味・必要に基づいた学びをすることが子どもにとっては最も重要だという点と、②強い動機のある学びは、探求することそれ自体が好きな人間を育てるという点、をとらえている解答を高く評価した。

【講評】

「体験や見聞」が、百人一首カルタへの興味から古典文学へ関心が広がったというもの、趣味のK―

POP から韓国史の学びへ深化したというもの、好き・嫌い２つの体験を比較したものなど、設問の趣旨とかみ合った好解答がみられた。他方、学校の部活や家庭での習い事の具体例をあげて当初意欲がもてなかったが次第に上達したという解答や、趣味の例示に終始する解答、探求を学校での教科の成績が向上したことと狭くとらえる解答は、相対的に低い評価とした。